



なぞって練習

「気の毒な運命の花だね。一枝折ってこい」と源氏が言うとうと、薨風の門のある中へは、いつて隨身は花を折った。ちよつとしやれた作りになつてゐる横戸の口には、黄色の生絹の袴を長めにはいた愛らしい童女が出て来て隨身を招いて、白い扇を色のつくほど薰物で煙らしたのを渡した。「これへ載せておあげなさいまし。手で提げては不恰好な花ですもの」

■参考

※部風【じゆふう】

※生絹【すまじ】

※薰物【たきもの】

※煙らした【くゆ】

※提げて【た】

(青空文庫のフリガナより)